

青年共産同盟機関誌第5号

# 武裝

目次

- 2 強固な革命指導部＝党を建設し、  
共産主義武装行動委員会を軸に  
行動委員会運動を革命的に推進せよ！
  
- 9 遊撃戦と大衆戦の結合をもって、  
学費値上げ粉碎の革命的全共闘運動を構築せよ！
  
- 12 共産主義武装行動委員会を建設せよ！  
青年共産同盟の位置と任務
  
- 17 あらゆる学園に全共闘革命派運動を確立せよ！
  
- 26 工場・職場に労働者行動委運動を建設せよ！

---

武 装

青年共産同盟機関誌

第5号

## 強固な革命指導部 II 党を建設し、 共産主義武装行動委員会を軸に

### 行動委員会運動を革命的に推進せよ！

I 党としての革命的党派闘争を貫徹せよ！

全国の革命的労働者学生諸君！

現時点における日本階級闘争の特徴は、伝統的な戦後型階級闘争の総破綻と自然成長的な反乱闘争の挫折とを実体的基礎にして、「左翼政治指導部の危機」が深化しつつあるという点にある。

そして、この事實は、現在われわれ革命的労働者学生に対し、革命的党派闘争の貫徹が、こうした政治指導部の危機を突破し、階級闘争の危機を打開するために、不可欠な戦略的意義をもつてきていることを告げ知らせている。

#### 二

五〇年六〇年代にかけて戦後型闘争の主流派であった既成指導部は、すでに七〇年安保闘争にいたる過程で脱落し、今日、社会党の三分解状態と総評岩井体制の瓦解にその破綻をあらためて暴露した。そして、かれら社民「左派」の没落によつて、労働戦線統一と野

党再編をめざす右派ブロックが軸となり全体として右への統一戦線が進められている。それは、社民政治の市民主義的右傾化と組合官僚の革命的組合統制の強化とをもちたらずである。

われわれが革命的指導部として、これとの党派闘争を貫徹することなくして、また、これまで全共闘運動や「反戦派」に結集してきた革命的労働者学生がプロレタリア内部の階級闘争としてかれらを生産点から放逐することなくして、権力闘争を実現することも不可能であるということは、もはや明らかであろう。

#### 三

だが、問題はそれにとどまらない。

戦後型闘争の「急進版」を展開してきた新左翼諸派指導部も深刻な危機に陥っている。

たしかに、新左翼運動は、六七年初〜六八年前半の反乱的街頭実力闘争をきりひらき、それによつて大衆的学園占拠闘争への突破口をつくりだした。

だがかれら新左翼指導部は、それを工場占拠・二重権力・武装蜂

起の革命闘争に向けて発展させることを放棄し、逆に、予期しなかつた占拠闘争の高まりを、反政府街頭行動のスケジュールの展開へと流しこむことに全力をあげ、そのための党派軍団へのセクト的囲いこみに全力をつくした。ここにかれらの小ブルジョア的急進主義

反政府派としての階級の本質と歴史の限界とが暴露されたのである。しかもかれらは、「安保決戦勝利」と総括することによつて事態を陰蔽してきた。そして現在、「敗北の事実」による力関係に迫い

まくられ、ふたたび、六七年以前の自治会主義的運動へと回帰しようとして試みている。もう一度、反政府、反帝闘争の課題をスケジュール型に設定し、つまるところ運動の自然成長的な「発展」を期待しているのだ。これは、まさにレーニンの言う「自然発生性への引き」以外のなものでもない。

#### 四

ところが、かれらにとつて不幸なことに、階級闘争の発展は、同じ道のくり返しを拒否している。帝国主義国家権力は、強化された体制を背景に、ロックアウトを主要武器とする攻撃をもつて、職場・学園への攻撃―秩序の強要―を迫っているのである。したがって、現時点では、戦後体制の一環としての「戦闘的、党派的自治会主義運動」を維持しようとするならば、この敵権力（そして、経営者、当局）への屈服を前提とする以外にない。なぜならば、そうした運動は、自治会室、サークル室等施設の享受、自治会費の確保、学内宣伝活動の公認等々といった自治会運動の合法的保障をもつて、街頭行動への結集をはかる構造をもつからである。だが、それは、運動の著しい後退と無力化を意味するばかりではなく、みずからの「秩序派」への転落を意味する。すなわち、目的意識的な反乱闘争に

対して、「戦闘的・党派的自治会運動防衛」の名の下に、敵対し圧殺する行動をとり、秩序維持のための暴力へと転落するのである。

#### 五

全国の革命的労働者学生諸君！

革共同中核派は、まさにそうした行動への突破口をきりひらいたのだ。かれらは六八年前半の過程で街頭闘争のヘゲモニーを握り、新左翼運動の「責任ある」主流派となつた。そして、六九年闘争の敗北の事実上の確認以後、かれら中核派は、全面的に「党建設」と称する「党派防衛」路線をとりはじめた。だからこそまたかれらは、秩序派への道を他のいかなる諸派よりも先がけて突進している。

今年五月〜七月までの法大闘争と九月以降の全過程が、それを何よりも雄弁に物語っている。中核派を主流とする法大全共闘は、一貫して「法政民主主義」体制の枠の中で、慎重に大学当局と学園秩序に対する凝制の対決を続け、その限りで法政は街頭行動への宿泊所と出撃拠点として維持されてきたのである。

だが、今年二月、権力と文部省の圧力の下に法大当局が「告示」を発し、大学法実質化の第一弾として、学内諸活動への規制を打出した。これに対し、中核派は、口先きでの反対と行動における慎重な対決回避の態度をとり、四月沖繩「決戦」や六月安保「決戦」へのカンパニア的結集に全力をあげた。そして、五月に入りようやくたい動を開始した告示粉碎の学園反乱のきざしをみて、たちまち本質を暴露した。すなわち、「ロックアウトを挑発する」という理由で、告示粉碎の部分を取り壊そうとしてデモを組織し、さらには、反乱闘争の指導部として登場しようとした営闘委や安保共闘を排除するために、法大全共闘を動員することに躍起となつたのであ

九月を迎え、事態はさらに進展した。かれらは、教大生事件でみずから部分ロツクアウトを招いた。そして、これに対しても中核派は、組織防衛の観点から、ロツクアウト粉砕闘争につき合いながら、「入管決戦」を対置して、そこに流しこもうと努力している。動員されたかれらのゲバルト部隊は、当局や権力に向けられているのではなく、法政大学をはるか離れた地点で党派防衛のためにかり出されている。

こうしてかれら中核派は、ますます左翼秩序派としての性格を深めてきているのである。

#### 六

全国の革命的労働者学生諸君！

たしかに、現在、われわれにとつて、アジア反革命体制の一環としてたちあらわれている入管体制を粉砕することはきわめて重要なことである。だが、激化する世界危機とアジア革命戦争の展開される中で、その闘いが真に革命的意義をもつのは、まさに日本の労働者階級・学生人民の、国家権力を解体し、みずからの権力を構築する革命的権力闘争の一翼としてかちとられるものでなければならぬ。

これに対し、ロツクアウト攻撃に屈服し、ブルジョア秩序になれ合うことによつて、党派防衛をはかるごとき入管闘争とは一体何なのだろうか。果してそれが、アジアの被抑圧民族との「革命的」連帯を意味するのだろうか。そういうブルジョア体制とのなれ合いによる「反帝」闘争とは、社民や日共やソ連の専売特許のはずではなかつたのか。

ふりかえつてみれば、戦後体制の崩壊の過程は、組合主義労働運動を破産させ、社民指導部と組合官僚を革命的労働者への公然たる弾圧者としてふるまわせた。また、学園占拠闘争の全国的爆発と全共闘運動の革命的発展は、日共の「教授会自治の防衛」と民青自治会路線を破産させ、かれらをそれに敵対する秩序のゲバルト部隊として明確に登場させたのであつた。そして、今や、街頭反政府行動の無力化と「戦闘的」自治会・党派全学連運動の学園秩序への屈服は、左翼戦線を自認する諸セクトを、同じく秩序の友へと導こうとしているのである。

したがつて、われわれの中核、秩序派解体闘争は、自然発生性への抨きと目的意識的反乱への敵対物との闘争であり、階級闘争の危機の反映としての政治指導部の危機を、革命的に打ち破るための革命党としての闘争にほかならない。

全国の革命的労働者学生諸君！

われわれは、全ての共産主義者、全ての先進的活動家諸君に訴える。今こそ、中核派を筆頭とする既成の新左翼運動と訣別し、それを解体し、のりこえよ、と。

現在でもわれわれは、あちこちで、左翼戦線の再編やら、党派闘争の貫徹とかいつた声を耳にする。だが、これまでの新左翼諸派の党派闘争や再編路線は、内輪もめにすぎなかつた。所詮どのセクトもせいぜい既存の新左翼運動の主流を防衛することや、あばよくば第二、第三の中核派になることを求めてきたにすぎない。その末路は、中核・秩序派の現状として眼のあたりに見ることがができる。

全国の革命的労働者学生諸君！

共産主義者は種々の主観的なことばによつてではなく、客観的な行動によつて判断される。

既成の新左翼運動と新左翼政治のなれあいから訣別せよ！

中核・秩序派を粉砕し解体せよ！

## II 学費値上げ粉砕・ロツクアウト体制粉砕の

地区反乱。学園人民戦争を貫徹せよ！

社共・組合官僚を

全社会的に粉砕し、放逐しつくせ！

占拠闘争・ソヴエト運動を組織する

革命的指導部を強固にうち鍛えよ！

#### 八

全国の革命的労働者学生諸君！

現時点における帝国主義支配階級の攻撃の焦点は次の三点におかれている。

第一は、七〇年に向けてかれらが準備し動員してきた権力機構を恒常的な有事出動体制として再編定着させ、それを背景に職場、学園に対するロツクアウト攻撃を構えていることである。それによつて、全社会的権力の露骨な介入と支配を強化しようとする動きである。

とりわけ、この間の階級闘争の中で起爆薬の役割を果たしてきた学園に対しては、増強に増強を重ねてきた機動隊を、周辺にそれぞれ分散配置し、その緊急出動によつて闘争への先制攻撃を加え、さらにロツクアウトを保障する体制をとつてきている。いわゆる大学法の実質化——学園管理の権限強化・学生処分・指名告訴等々の攻撃

——は、この体制の下にすすめられているのである。

第二は、昨秋の日米共同声明の基本路線にもとづき、アジア反革命体制の強化をすすめてきていることである。さきごろ、「日本軍国主義の復活」問題としてとりざたされている事態は、日本帝国主義が、破綻した東南アジア集団安全保障機構にかえて、新たな日米アジア反革命体制の一翼を担うことを意味している。かれらはすでに、在日米軍との連繫による朝鮮半島、台湾への出撃体制を、戦略基地の再編強化として着手しているのだ。

そして、現在策動されている「入管法」再上程はまさにそのようなアジア反革命支配の一環として、在日アジア人民の一切の政治活動の禁止を骨子とする弾圧攻撃にほかならない。とりわけ、朝鮮人民に対しては、いわゆる地位協定によつて、朴軍政下の「韓国籍」の強要と「強制送還」という攻撃が加えられようとしているのである。

第三は、経済危機の深化に直面しつつある帝国主義ブルジョアジの生産調整・合理化攻撃の強化である。そうした動きは、すでに電機産業・自動車産業を中心として進行しており、それに従事する労働者への締めつけと犠牲の転嫁が著しい。最近、民間産業の労働者の闘争が激化してきているのも、その具体的反映にほかならない。

さらに、現在、最も注目しなければならないのは、私立大学を中心とする学費の一斉値上げの攻撃である。私立大経営者は、放漫経営からくる負債と利子負担にあえぎ、一様に深刻な財政危機に陥つており、その打開を全面的な学生への犠牲の転嫁によつて、求めようとしている。今や、学生の存在条件そのものをも破壊する高額学

費が課せられようとしているのだ。

九

全国の革命的労働者学生諸君！

以上みてきたように、われわれは、左翼政治指導部の危機の中における党としての革命的党派闘争の貫徹をみずからの任務として設定し、同時に、全社会的なロツクアウト体制を打破する「地区反乱—学園人民戦争」と、それに向けての攻撃的・遊撃的行動委員会運動の展開を確認した。

このことは、われわれが、世界危機の深化の中で日本階級闘争もまたかかる権力闘争を目的意識的に構築する段階にいたつたという根底的な認識を前提とし、既成のカンパニア運動——戦後型闘争からの訣別を宣言したということを意味している。

そして、そこから革命的権力闘争を担う革命指導部—党の建設が要求されるであろう。しかも、こうした党は、これまでの新左翼諸派の一般的な寄せあつめや手おしによつて形成されるものでは断じてありえない。

それはまさに、階級闘争の内部における矛盾——戦後型闘争の急進カンパニア版としての運動および組織の残しと権力闘争およびそれを担う党との対立——を基礎とした激烈な闘いをぬきにしてはありえない。そしてそれはまた、われわれ自身においても、不断にみずからの内部の革命を遂行していく過程にほかならないであろう。

十

これまで新左翼各派にあつても、さまざまに「党」の建設が唱えられてきた。とりわけ、六八—六九年の闘いをとおして、七七〇年代闘争を担う党々とか々内戦（内乱）をうちぬく党々といった形で

これは、ある意味では街頭実力闘争の破綻の上にたち、それを「権力闘争」に直結させ、そのための「党—軍—統一戦線」の強化を主張するものである。

この路線の決定的誤りは、「恒常的武装」として強調される軍事行動と軍事組織が、ソヴェト運動の構築過程と現実的にはきりはなされ、街頭行動に一面的に傾斜することにあるだろう。

それは、かれらの戦略的戦術としての中央権力闘争が、実は、反政府・反権力闘争であつて「権力闘争」でないことに本質的な根拠をもっている。

そして、今日、街頭実力行動が困難な事態を迎えるにいたり、かれらの言う「革命の軍隊」は軍事行動なき々軍隊々となつて空洞化し、軍事をも組織することをめざしたはずの「党の革命」もまた、空論化せざるをえなくなつていく。

こうした新左翼運動にみられる二つの党建設路線は、戦後型闘争のもつ戦略的境界に規定され、いずれも破綻を余儀なくされているのが現状である。たしかに、ブントの場合には、一応運動の境界から総括し、それを組織自身の革命へと発展させようとした視点はもつていたが、それが運動の戦略的転換として設定されないために、結局、組織の革命もまた実体の変革を伴わない空論的段階にとどまらざるをえず、さらにまた、もしそれを実体的に進めれば、赤軍派型の単に党を軍隊化させる路線として分離していかざるをえなかつた。

そして、今や、運動そのものの戦略的止揚——街頭反政府行動を主体とする既成の新左翼運動から萌芽的端緒的ではあれ、占拠闘争—ソヴェト運動を現代的に推進していくことを主体とする路線への

強調されてきた。

かれら新左翼諸派の場合、既成指導部・社民からの分離と党としての自立を一貫して回避してきた社青同解放派を別とすれば、およそ二つの「党」建設路線に大別できる。

一つは、革共同に典型的に表現されているように、その運動の実体（したがつてその本質でもあるわけだが）を文字どおりの組合主義的・自治会主義的運動におき、それを事態の流れに依つて急進的に、あるいは、日和見的に展開するものである。そしてかれらの「党」とは、そうした運動の展開を手段に、あるべきイデオロギイ的思想的立場の一致をもつて囲いこまれ形成される。

したがつて、かれらの場合、「党」が現実の運動にかかわる際の「指導」はたえず経験主義的であり、「運動」がその枠を越え、あるいは、その境界に直面するや、組織の官僚的統制やいちぢるしい党派防衛の路線へと陥るのである。七〇年安保をめぐる二年間の階級闘争の展開から、革共同両派が結局何一つとして新たな「党」問題を提出しえなかつたこと、その中で街頭反政府行動の主流を自認したはずの中核派が、運動の発展と限界からみずからの組織を変革することを一貫して不問に付し、つまるところ、たえず「勝利」の総括をくりかえして正当化せざるをえなかつたこと、そして、今年四・二八闘争をきっかけにして、社共を上回る動員を保障する党の建設と称し、むしろ、新左翼主流派の座の確保に躍起となる保守的対応をとるにいたつたことは、それをよく示しているであろう。

もう一つは、ブント系（赤軍派やML派もほぼ同じ傾向とみてよい）の打出した「党」建設路線である。

飛躍—を組織する革命指導部—党が建設されなければならないことがますます明白になつていく。

十一

全国の革命的労働者学生諸君！

われわれは、さし迫る組織的課題として、「党—武装行動委員会—ソヴェト」運動の強固な構築を任務としなければならない。

プロレタリアートの蜂起の機関としてのソヴェトは、工場武装占拠闘争を出発点とする。

だが、日本階級闘争の現局面は、自然成長的学園占拠闘争の挫折を契機にして、大衆的占拠闘争の即自的展開は困難となつていく。

また、大衆反乱の一挙的爆発が具体的に期待しうるほど危機は深化しきつてはいない。

したがつて、われわれがソヴェト運動を追求しようとするならばそれは、目的意識的・攻撃的・遊撃的な行動体による運動—行動委員会運動—として展開しなければならない。

しかも、敵権力の支配が、機動隊の有事出動—ロツクアウト体制を主武器としており、さらに左翼秩序派との党派闘争が不可避免的に激化している以上、先進的大衆による行動委員会運動も、政治的・軍事的に強固に修熟された部隊によつて保障されない限り、展開不可能となつていく。職制や争議専門のガードマンや右翼秩序派を粉碎する闘い、緊急出動の機動隊を部分的に撃破する闘争、左翼秩序派を解体させ反乱戦線から放逐する闘い、バルチザン行動と群衆戦の組織やその結合—こうしたすべての闘争は、高度な政治性と軍事技術を要求するからである。

われわれは、青年共産同盟こそ、かかる共産主義武装行動委員会

として、ソヴェト運動を組織する中核体として、根底的に再組織することが迫られていると考える。

そして、軍事を組織しうる党の「軍事」とは、実はこうした今日問われているソヴェト運動の困難な展開をきりひらくものとしてつきつけられているのだということを確認しなければならぬであろう。武装行動委員会を組織し、これを率い、それによつて大衆行動委員会―ソヴェト運動を構築していくこと、これが党の当面する任務である。

全国の革命的労働者学生諸君！

かかる革命指導部を強固にうちたえることは、われわれすべてに課せられた火急の任務である。そのための作業にあらゆる力と情熱を惜しむことなく結集させようではないか！

## 遊撃戦と大衆戦の結合をもつて学費値上げ粉碎の

### 革命的全共闘運動を構築せよ！

全国の革命的労働者学生諸君！

一〇月を迎え、東海大学では、学園アウシユヴィッツ粉碎の炎が満天空を焦がすばかりに燃え上つた。

アウシユヴィッツ体制―それは、六八年爆発した全国学園占拠闘争に対する敵権力・大学当局の練りに練つた弾圧体制である。

東海大学当局は前期五月、右翼学生の暴力支配に抗して決起した運動の発展に驚がくし、全面ロックアウト措置をとるとともに、「抜本的」な対応策にのり出した。

すなわち、かれらは、巨費を投じて一〇万坪にのぼる学園周囲に鉄さくをはりめぐらし、争議専門の右翼ガードマンを大量に雇い入れた。そして、国家権力との密接な合議のもとに、活動家の指名告訴と緊急出動体制をとり、狙いうち処分を連続的にかけてきた。

さらに、父兄面接と誓約書の提出を強要し、それと引換えに入構証を与え、徹底したレッドパージを行つてきた。授業の再開は学年

別に分け、学生の分断化を慎重にすすめた。そして、学内では一切の集会らしき集合も、宣伝も禁止され、それに抗するものはガードマンがけちらし、暴力を加え、大学が退学処分を課したのだ。これこそ、日大・拓大と全く同様の「アウシユヴィッツ体制」そのものであつた。

全国の革命的労働者学生諸君！

だが、こうしたかれらのあらゆる手段を動員し練り上げた弾圧体制も、ついに崩壊の途についた。

戦端は、一〇月五日、全学行動委員会連合の革命的学生を主体とする対右翼ガードマン闘争の遊撃戦の展開によつてきりひらかれた。

それは、敵の虚をつく機動性に支えられ、右翼ガードマンを分断し、撃破し、粉碎しつくした。このバルチザン戦の勝利こそ、あらゆる学生の眼のあたりに、みずからの敵の存在と闘いの可能性を鮮かにうつし出し、闘争への決意を限りなく鼓舞するものであつた。

そして一〇月七日と八日、鉄さくをのりこえ、手に手に棒をもつてガードマンと闘い、投石戦や焼き打ち戦をも敢行し、出動した機動隊とも攻防戦が演じられた。これらはすべて何千という東海

大学の学生大衆によつて担われたのだ！  
10 今や、ロツクアウトIIアウシユイツ体制に真向うから立ち向う革命的全共闘戦線の火が燃え上つたのである。

二

全国の革命的労働者学生諸君！

だが、ロツクアウトIIアウシユイツ体制粉碎の闘いは、決して東海大学に特殊な課題ではない。

それどころか、警察機動隊の導入とロツクアウトの先制攻撃によつて運動の昂揚を挫き、さらに、学園の収容所化、レッドページ、右翼ガードマンによる学園秩序の暴力的維持というアウシユイツ体制をとることは、敵階級の基本的な学園支配攻撃の手段となつている。

それは、東大・日大闘争を両軸とした全国学園占拠闘争の爆発に對するこれらの「総括」の結果にほかならなかつた。

そして、これまでのいわば自然成長的な学園反乱闘争は、この攻撃の前に、有効で強力な闘いを再構築することができなかつた。

帝國主義国家権力・私学経営者たちは、この体制をもつて現在、全国一斉の学費値上げを狙っている。かれらは、財政危機の負債を学生の犠牲と負担によつて処理しようとしているのだ。

こうして、権力と資本は、全国数百万の学生大衆をかかつてない支配と収奪のくびきの下に陥れようとしている。

全国の革命的労働者学生諸君！

この攻撃を突破する革命的全共闘運動の構築が、決定的に重要な時が訪れた。新たな全共闘戦線の再生は、単純に従来からの街頭ス

ケジニール闘争の反覆や、自然発生的・経済主義的な改良闘争の積み重ねの中から求めることはできない。

また、既成の新左翼運動の待機主義的カンパニア路線は、その無力性を暴露するのみならず、敵階級の攻撃に屈服し、カンパニア運動の合法的保障のために、むしろブルジョア秩序の側へと転落しつつある。

われわれは、こうした部分と明確に差別しなければならぬ。

そして、われわれは、「工場学園占拠II三重権力I武装蜂起」に向けての強固な目的意識性をもつ共産主義武装行動委員会を核とする遊撃戦を展開し、大衆戦を組織し結合させ、大胆な大衆武装を貫徹し、革命的権力闘争として闘いぬく必要がある。学費値上げ粉碎、ロツクアウトIIアウシユイツ体制粉碎闘争を、まさにその突破口としようではないか。

三

全国の革命的労働者学生諸君！

学園アウシユイツ体制粉碎闘争の意義はそれだけではない。

その革命的意義は、現時点における革命的労働者の直面し、打開すべき闘いと同じ質をもつ点にこそ存在する。

深まりゆく日本帝國主義の危機は、ますます労働者階級に対する合理化と収奪の攻撃を激化させている。

だが、これまでの先進的労働者の闘いは、職場をはなれて街頭行動に参加するか、あるいは、組合官僚に対する抵抗やつき上げを行ううかが一般的であつた。

そして今日、先進的労働者が一定の力をもち、戦闘的組合運動に

よつて資本の攻撃と対決する動きがいくつかみられている。その中には、多分に自然発生的な対職制闘争などを通して職場の流動的制圧にまでいたる闘いも現われている。

これに對し、敵階級は、露骨にロツクアウト攻撃をうち出し、機動隊とガードマン体制によつて、先進的労働者の締め出しと分断をはかつている。

そして、これまでの多くは、この攻撃の前に、組合的結集の分解を恐れ、屈服していったのである。

それゆえ、革命的労働者にとつてもまた、そうした従来の型の運動からの飛躍が迫られ、職場の流動制圧戦から、ロツクアウト攻撃をうち破る遊撃戦と大衆戦の結合が問われているであらう。

われわれのロツクアウトIIアウシユイツ体制粉碎闘争は、階級闘争全体の普遍的な先駆的な意義をもつている。

だからこそ、われわれの革命的全共闘戦線は、その出発から明確に、労働者階級の工場占拠闘争をめざす闘いとしてかちとられ、地区労学行動委員会の形成を推進していくものでなければならぬであらう。

四

全国の革命的労働者学生諸君！

闘いの秋はきた！

遊撃戦と大衆戦の結合をもつて

11 学費値上げを粉碎し、ロツクアウトIアウシユイツ体制を粉碎せよ！

それを突破口として、革命的全共闘戦線を構築せよ！

労学反乱・革命的権力闘争を貫徹せよ！

一切の秩序派を解体し、革命独裁を確立せよ！

強固な共産主義武装行動委員会を建設し、大衆行動委員会を組織せよ！

## 共産主義武装行動委員会を建設せよ！ 青年共産同盟の位置と任務

山野 辺 健 三

### 一、青年共産同盟の実践的組織的総括

われわれが、現実の階級闘争に実践的組織的主体として登場して以降の過程は次の三つの段階に区分できる。

- 第一段階―東大園占拠闘争と安保共闘
- 第二段階―六九年新宿闘争と安保共闘・新宿共闘
- 第三段階―行動委員会運動の展開と党内革命

青年共産同盟の組織的位置と任務を明確化するために、われわれは最初に、こうしたみずからの活動の概括的な総括を確認しておく必要がある。

### △第一段階―東大園占拠闘争と安保共闘▽

この段階は、七〇年安保をめぐる階級闘争が、六七―六八年前半の街頭実力闘争の展開をきっかけとし、さらに中大学費闘争を媒介

にして、日大―東大を軸とする大衆的学園占拠闘争が爆発し、またその力を基礎とした一〇・二一新宿占拠闘争が奔出したものであった。それは、いわば、自然成長的占拠闘争の登場―革命的権力闘争の萌芽といふべきものであった。

そして、われわれが組織として現実の闘争にはじめてかかわったのは、この段階の後半―東大闘争の後半期であった。

われわれは、組織したばかりの安保共闘と、全闘連をおした東大共闘へのある程度の影響力をもつて、かわりはじめたわけであるが、そこで方針上、もつとも鋭く対応が問われたのは、一・二二闘争であった。

当時すでに、東大闘争は、全共闘が加藤新執行部に対する方針を誤り、「団交拒否」というみせかけの断固路線―事実上の全共闘・党派の防衛路線と対日共・右派闘争の回避へと陥ることによつて、運動全体が後退しつつあった。

日共は、この機に乗じ、全都のゲバルト部隊を動員して、闘争の圧殺と党勢拡張に全力をあげようとしていた。

また、国家権力は、閉鎖どう喝をちらつかせながら、介入の準備にとりかかろうとしていたのであった。

一・二二闘争こそ、こうした状況に対する、とくに、日共の闘争破壊に対する即目的な危機意識を反映し、日大全共闘を筆頭として、全国各地から圧倒的な左派大衆がなかば自発的に結集するという構造をなしていた。

しかも、この事態に対して、革マル派や新左翼諸派は、「官憲の介入回避」を口実に、この結集をカンパニア的セレモニーにすりかえることに汲々としていたのである。

したがって、われわれに問われた任務は、第一に、こうしたカンパニア・セレモニーとの対決をおして闘争意欲に燃え結集した広範な左派大衆を流動化させ、第二に、それによつて、対日共闘争を貫徹しぬいて東大全共闘の革命独裁を再確立し、第三に、すでに反撃と介入の準備に入りつつあった国家権力に対する攻撃的・積極的ヘゲモニー―全共闘の革命独裁の下に密集する革命派大衆の戦闘体制に敵権力をひきこむことを獲得することであった。

だが、われわれは、そうした位置づけをなしえなかつたし、何よりも致命的であったのは、そのような現実の方針を設定し、それを準備し保障するような、革命指導部としての質を欠いていた。それゆえ、安保共闘との共闘関係に結集した部分や東大全闘連の部隊を、左派大衆からひき上げ、闘争を貫徹することができず、逆に、ことばとはうらはらに行動上は、新左翼諸派と同一の立場におちこんだのであった。

そして、東大闘争は、また全国学園占拠闘争は、ついにこれを転機に、権力に対し攻勢に立つことなく全面的後退を重ねていくこととなつた。

### △第二段階―六九年新宿闘争と安保共闘・新宿共闘▽

東大闘争以降、われわれは、「都市反乱闘争から工場・学園占拠ゼネストへ」というスローガンの下に、新宿闘争の組織に着手した。それはまた、東大闘争において受けた物理的打撃と路線上の混乱から、組織を再建していく第一歩でもあった。

周知のように、六九年新宿闘争は、ベ平連系のフォークゲリラによつて開始されたものであったが、われわれの恒常的介入以降、西口―東口のデモの組織と指導がわれわれの手によつて保障されることになった。それはわれわれが独力で行動のヘゲモニーをかちとつた最初の闘争でもあった。その中から、われわれは、安保共闘の再建・結集と、新宿共闘の組織化を一定程度推進することができた。

そこで、われわれに問われた任務は、獲得したヘゲモニーを最大限に発揮して、全社会的につきつけられた党派闘争―都市反乱闘争から工場学園占拠闘争への革命的発展をめざす路線か、蒲田現地闘争による一・七、四・二八闘争で破綻した街頭政策阻止闘争の回復の道か―を攻撃的に展開することであった。しかもそれは、われわれの位置からして、みずからの五―七月における新宿闘争の爆発をおして貫徹する以外になかつたのである。

ところが、その時点におけるわれわれの認識は、いかにして五―七月の新宿闘争を一〇―十一月にまで延長させることができるか、というものであつて、著しい消極性と待機主義の限界をもつていた。

したがって、六・二八新宿西口・新宿郵便局合理化闘争という決定的な闘い―まさに都市反乱と職場占拠闘争の部分的結合―に



あつても、それを真に戦略的な闘争として爆発させる準備も保障もなすことなく、一般的な街頭反乱にとどめてしまつたのである。

その結果、一〇—十一月における戦線配置は、主力のほとんどが現地闘争へと無展望に吸収され、新宿都市反乱闘争への結集は、われわれが本来獲得しえたはずのごく一部と、残りは偶然的に結集した大衆にすぎなかつた。そのことは、われわれの闘いが、計画された反乱闘争として貫かれたのではなく、単に新左翼諸派の現地行動に、新宿地区の一定程度の反乱の行動を対置させるにとどまつたことを意味した。そして、そのことはすなわち、権力闘争を担うべきわれわれが、街頭反政府行動の新左翼指導部に敗北したことを意味した。

#### △第一、第二段階における青年共産同盟の総括▽

以上、われわれが登場して以降の第一、第二段階における主として実践方針上の総括をふまえた上で、われわれは、そこにおける青年共産同盟の組織総括を確認しておく必要がある。

この段階でわれわれが、闘争体として組織したのは「安保共闘」であつた。

安保共闘は、各戦線における安保粉砕行動委員会の共闘組織として位置づけられていた。

そして、その結集の内容は、まずもつて「工場・学園占拠、街頭制圧、都市反乱」で「安保を粉砕する」ということであつた。だが、それを確認しつつ、安保闘争を通して「安保闘争を利用して」「工場占拠、二重権力、武装蜂起」の革命的権力闘争を構築していくという戦略的・綱領的任務を担うことを確認した組織体でもあつた。

この時点で、青年共産同盟は、一応結成されてはいたが、事実上「安保共闘」組織の中に埋没していた。

結局、われわれの組織実体は、青共同と安保共闘が未分化なまま、二重化された状態にあつたわけである。

このことは、安保共闘を構成する各戦線の安保粉砕行動委員会が、大衆的行動委員会としては存在せず、またそうした影響力をもつものでもなく、逆に、青年同盟が不断に安保共闘に二重化することによつて党派組織としての強固な質をもちきれていないというあいまいさを生んできた。

そして、実際には、青共同を内包した安保共闘は、あいまいさを残した形で党派組織としてあり、しかも、その下に大衆的行動委員会としての基盤をもたないなかば裸の状態で運動を展開していつたのである。

これが、われわれの組織のあるがままの実状であつた。

この点にかかわつて、われわれは、主として次の二つの側面から総括する必要がある。

一つは、運動の客観的・主体的条件からくる限界であつた。

日本における階級闘争が、七〇年安保をめぐる街頭反政府闘争の反乱の展開をおして「大衆占拠闘争」という権力闘争の第一歩を踏み出したという特殊性は、当然のことながら、当時の時点においてわれわれに、安保闘争をおして、革命闘争を構築していくことを迫つた。だがそれは同時に、われわれの運動の基盤が、自然成長的な学園闘争や街頭の反乱の実力行動に大なり小なり依拠していることを意味しており、したがつて、権力闘争としての貫徹を担う革命指導部がみずからそうした限界と訣別し、不断に組織内部の点検

と止揚を最も目的意識的に遂行することによつてはじめて、「安保闘争を利用した」革命的権力闘争の構築が実践化されることを意味していたのである。(その点に関連して一言すれば、当時、われわれは、党と大衆闘争組織との関係において、即時的に全共闘をソヴエト的組織としてのみ把握、青共同・安保共闘の革命派による自然成長的全共闘の内部における不断の秩序派・カンパニア指導部に対する党派闘争と、それによる全共闘の革命的再編成という独自の任務に関してほとんど視点をもつていなかった。)

したがつて、総括すべき第二の側面は、われわれが、革命指導部としていかに、既存の運動の指導部・新左翼の体質と訣別したものであつたか、という点であろう。

だが、この点について、われわれは遺憾ながら、ほぼ全面的に自己の限界を確認しなければならぬ。

われわれのこの点についての限界が鋭く暴露された事実に関しては、先にみたとおりである。

すなわち、東大闘争における一・二二をはじめとする対応の問題、六九年闘争をめぐる党派闘争と新宿闘争の限界がそれであつた。つまるところわれわれは、組織の出发点から、そうした既存の戦後型・反政府運動と新左翼の体質からの訣別を不明確にし、なおかつ、それを実践の中で変革していくことに踏み切れなかつたのである。

そこからは、レーニンのいう「凝縮された政治闘争としての党派闘争」の積極的展開は保障さるべくもなかつた。

そして、われわれは、今年に入り、ようやくみずからの目的意識的な権力闘争の構築と組織の内部における革命の課題に向つて前進

をはじめたのであつた。そして現在、そこから、われわれは、新たな青年共産同盟の位置と任務を規定することが迫られているのである。

#### △第三段階「行動委員会運動の展開と党内革命」▽

昨年一月をもつてする第一、第二段階の闘争の終えんは、全体として、戦後型闘争の破産を最終的に宣言し、また自然成長的占拠闘争の挫折を意味していた。

われわれは、こうした安保をめぐる階級闘争の敗北をふまえて、新たな目的意識的的反乱闘争を、全通南部闘争を突破口にして、大胆に開始した。

それは、攻撃的・遊撃的な行動委員会運動の展開による反乱闘争の構築であつた。そして、その実践の中から、「内部階級闘争の推進と学園人民戦争の貫徹」「バルチザンの闘争の保障と地区労学行動委員会の形成」「大衆行動委員会の組織と結合、全共闘革命派の登場と党派闘争の貫徹」などの任務が確定されていつたのである。

(理論武装シリーズNo1参照)そして、そうした任務を担う、青年共産同盟の武装政治組織としての再編が、ここに抽象的にはあれ、はじめて提出されたのであつた。

しかし、このような任務の実現は、それに耐えうる組織体制をぬきにしてはありえなかつた。それを、われわれは、第一、第二段階までの敵密な組織総括・自己点検として獲得しなければならなかつた。

その点に関するあいまいさとなしくずし対応の誤りは、五一六月闘争の過程で痛烈に暴露された。

すでに、前衛紙上等を中心に行われたこの間の論争でもはつきりしているように、法大闘争における告示粉碎・学園反乱闘争の中途放棄とカンパニア運動内部に転落した党派闘争の展開といった形でその誤謬が端的にあらわれたのである。

われわれは、かかる事態に直面し、ようやく自己の革命指導部としての再編成Ⅱ党の内部革命に着手し、われわれの内部に存在する「新左翼内反対派」的傾向や「カンパニアの自己保身的」体質を払拭することに全力をあげてきた。

そして、現時点では、それをさらに、実践闘争を貫徹する中で、革命指導部の強固な建設へと飛躍させる段階に突入しているのである。

Ⅰ党Ⅰ武装行動委員会Ⅰ大衆行動委員会の建設へ

以上みてきたように、われわれの目的意識的な反乱闘争の展開と革命的権力闘争の再構築を追求する闘いの過程から、従来、あいまいな点を残してきた組織問題への現実的な解答が迫られているであろう。

第一に、今日の敵階級・国家権力の攻撃の主要な武器が、先制的なロツクアウト体制によつていることを確認しなければならぬ。

これは、六八年以降の自然成長的占拠闘争から教訓化され、うち出されてきている支配階級の職場・学園に対する基本的な対応策となつてきている。

今秋以後、ますます激化するであろう合理化攻撃、学費値上げ攻撃等と対決する闘いは、このロツクアウト体制を打ち破ることなくして展望はありえない。

第二に、とくに学園に対しては、七〇年に向けて増強を重ねた機

動隊を分散配置し、その緊急出動体制を背景にして、学内を右翼学生・右翼ガードマンによつて固めるといふ「アウシュヴィツ」体制が施かれてきている。そこから、権力の有事出動体制下における右翼学生・ガードマンを粉碎する闘いが問われているのである。

第三に、法大闘争で端的に暴露されたように、既成の「戦闘的」自治会運動の指導部である新左翼諸派が、こうしたむき出しの職場学園支配の攻撃に対して、自派の街頭行動への基盤を確保すると称し、屈服路線を歩みはじめていることを確認する必要がある。それはすなわち、彼らのブルジョア秩序派・秩序派暴力への転落を意味している。それゆえ、今や行動委員会運動の革命的展開にとつて、これとの闘争は不可欠な課題となつていようである。

第四に、われわれの展開している大衆行動委員会運動は、先にみた第一、第二段階の安保共闘の場合とは異なり、職場・学園の基礎的組織を基盤にして戦線別に形成されている。したがつて、こうした大衆行動委員会のもつ個別性をこえて、相互に結合させ、部隊を集中させること、あるいは運動の発展に際してこれを分解し再編成させること、そして、不断に権力組織へと高めていくことがつきつけられる。

以上のような諸任務を遂行するためには、一般の大衆行動委員会とは独自の共産主義的武装行動委員会の存在が不可欠となるであろう。

緊急出動体制におかれた国家権力・機動隊に対し、その下に固められたロツクアウト・アウシュヴィツ体制の右翼・ガードマンに (三四頁に続)

あらゆる学園に

全共闘革命派運動を確立せよ！

行動委員会総武装を貫徹し、労学行動委員会を形成せよ！

一、切実な課題

全国の同志諸君！ 革命的学友諸君！

全共闘運動は、六八年の日大・東大闘争を頂点として爆発的に展開され、学生運動・日本階級闘争に革命の時代を画した。

そして、今日なお、いわゆる「新左翼」各派も、それから先進的学友諸君も全共闘運動を主張し、それに何らかの形でかかわつてい

る。だが、現在の全共闘の実状はどうなつていようか。まず、運動の実態面から見れば、その多くは自治会運動・サークル型運動の変形にすぎず、組織面から見れば、全国全共闘をはじめとしそれは「党派間統一戦線」として機能しているにすぎない。つまり全共闘の多くは、自治会・サークル型運動を基礎にしたカンパニア動員組織になつており、党派の困い込みの手段に転落してしまつてい

る。「全共闘」とは、単に、日共Ⅱ民青全学連や革マル全学連と区別

する総称にすぎないのか。あえて言うならば、現状の全共闘運動ははたして民青や革マル派の運動と質的に根底的に区別されるのか。

同志諸君！ 革命的学友諸君！

われわれは、全共闘のこうした現状を革命的に打開しなければならない！ われわれは、全共闘運動の登場をもつて、日本階級闘争が革命的権力闘争の時代に突入したことを確認した。

すなわち、従来の党派軍団の「街頭・反政府行動」やそれによる「中央権力の暴露闘争」と異なり、それは、

- (1) 革命的大衆武装を基礎とする権力組織の萌芽であり、
(2) 必然的に革命派大衆の組織であつて、内部の秩序派大衆に対する革命独裁を主張するものであり、
(3) そして、みずからの歴史的・社会的限界を反乱の拡大とりわけ労働者ソヴェト運動の形成によつて止揚すべきものであつた。

たしかに、日大Ⅰ東大バリエード闘争の挫折と昨年十一月羽田闘争までの街頭行動の敗北によつて、事態は困難な条件をつくりだし

ている。

もちろん、多くの学園では東大・日大闘争のように全面的に爆発しえないまま崩壊したのであり、その限りでは学園反乱の条件は十分残されている。

だが、すぐれて中央集権的な敵権力は、最も進んだ攻防戦の中から「教訓」を学びとつていたのであり、かれらはあらゆる学園の周辺に、機動隊の有事出動体制を施しているのである。

それゆえ、かつての「先進的部分による拠点バリケードとその武装防衛から、全学バリケードと大衆武装へ」というパターンが、事実上不可能となつていく。

問題は、いかにして大衆武装―全共闘運動の革命的再構築をかちとるかである。はつきりさせなければならぬことは、一般的なカンパニア動員の積みかさねや、それに対するセクト諸派の「革命的(?)」位置づけやうたい文句によつては、決して展望は切り開かれないという点である。

同志諸君！革命的学友諸君！

これに対してわれわれは、すでに新しい闘いの戦端を開いている。それはまず、行動委員会総武装の貫徹である。行動委員会武装こそ大衆武装の現在の担い手であり、来るべき大衆武装の核である。行動委員会は徹底した内部階級闘争の推進・学園ブルジョア秩序の破壊をおして武装する。それは、いわばバリケードなき「占拠」闘争であろう。それは、拠点バリケードとその武装防衛と同じく部分武装ではあるが、より積極的攻撃的武装である。と同時に、より意識的・不滅の闘いなくしては存続しえない性格をもつていく。

しかもこうした新たなわれわれの闘いの「意識性」は、はつきりと労学反乱―労働者ソヴェト運動の構築に照準が定められている。全社会的なプロレタリア内部の階級闘争は、社民・日共をはじめとする組合官僚の粉砕闘争であり、プロレタリア反乱は、それをおとした職場・工場行動委員会運動による職制・職場支配秩序の粉砕闘争として出発するであろう。したがって、われわれは、学園における行動委員会武装と制圧戦の貫徹を基礎にしつつ、最初から対社民組合官僚闘争、対職制闘争などを追求し、労学行動委員会の創出をめざすものである。

同志諸君！革命的学友諸君！

われわれは現時点において、全共闘の限界を、その総括から教訓化し、革命闘争に占める戦略的意義を再確認し、そして何よりも、新たな闘いを展開することの中から革命的に打開しなければならぬ。これは、四〇五月闘争で新左翼諸セクトの混乱がとめどもなく深まつている折から、反乱戦線に結集する全ての活動家に迫られている切実な課題である。

### 二、全共闘運動の現段階

(1)六七年―六八年前半―街頭実力行動から学園占拠闘争へ

すでに知られているように、全共闘運動をつくりだす直接の主体的条件は、六七年初頭から開始され六八年前半まで続いた街頭・基地実力闘争の中に存在した。

それは、日韓闘争以降の帝国主義国家権力の治安体制を部分的に

つき崩し、その行動の周辺に先進的大衆を結集し、次第に街頭反乱に転化させていったのである。その主たる担い手は、いわゆる戦闘的全学連であり、その限りでは戦後型階級闘争の域を出るものではなかつたが、羽田から佐世保―王子闘争へと移行するに従つて、事実上それを越える形の行動が生み出されたわけである。

そして、六八年学園占拠闘争にそれが引継がれることによつて、「反政府闘争」とは全く異質の権力闘争が日本階級闘争に登場した。

### (2)六八年―大衆反乱と全共闘組織

六八年の学園闘争は、中大学費闘争の大衆的昂揚を過渡的に経ながら、日大全学バリケード闘争の爆発へと突入した。

当時この日大闘争は「特殊日大的な闘い」としてみなされる傾向が強かつた。すなわち日大は音に聞こえた古田アウンユビツツ体制―体育会系右翼暴力による学生支配が存在し、六〇年安保も、六〇年代後半の再建全学連運動ともほとんど無縁であつた。したがって、日大闘争は、きわめて民主的な要求から出発し、最初から右翼暴力との捨身の攻防戦として展開されたのである。そして、拠点の部分バリケードから全学バリケードへ、さらに対国家権力との制圧戦による闘いを媒介にした大衆武装へと発展した。

この闘争の過程は、決して特殊日大的なものではなかつた。それはむしろ普遍的であり、先駆的な質をもつものであつた。東大闘争においても、対日共秩序派暴力、対ブルジョアノンポリ暴力との闘争が闘われ、またそうした学生内部における階級闘争の不徹底さこそが総括点として問われるべきであらう。

これらの学園占拠を基礎にして、新宿占拠闘争(一〇・二一)が

闘われ、それは一般プロレタリアをも含めた都市反乱としてかちとられたのであつた。

こうした「占拠―大衆反乱」の闘いに対応した闘争組織こそ全共闘組織であつた。したがって全共闘は、占拠闘争を闘う中で学生内部の階級闘争、あるいは、対国家権力との闘争を貫徹することをおして形成された革命派大衆の大衆的武装組織であり、秩序派大衆・右翼・日共等への革命独裁を行なうものであり、その意味で日本階級闘争における権力闘争の登場を告げるものであつた。

### (3)六九年―二つの敗北

六八年―一月以降、帝国主義国家権力は本格的巻かえしに転じた。その第一は学園バリケードに対する総攻撃であり、第二は全都ロックアウト体制による街頭行動への徹底弾圧であつた。

すなわち、六九年一月、敵権力は機動隊を総動員して東大バリケードへの破壊攻撃をかけた。これに対して、すでに六八年秋の段階で団交戦術における失敗と内部階級闘争の不徹底さによつて方向性を見失つていた諸セクト・全共闘は、敵のバリケード破壊の総攻撃に対し、籠城式の消極的なバリケード防衛路線に走り、結果として全共闘派大衆は放置されたまま反乱に敗北した。

他方、街頭行動においては、いかにして学園占拠闘争を再構築し、また、反乱の波を労働者階級に拡大させるかという課題が問われていた。権力はたしかに東大を突破口に、連続的な学園攻撃をかけてきたが、しかし依然として密集した全共闘派の闘う部分は存在していたのであり、再び今度は目的意識的に都市反乱を追求し、権力を都市の密集点に引きづり出して撃破する戦術が要求されていた。

だが現実には、四・二八闘争も一月闘争も党派軍団の単純突撃型デモのくり返しがなされたにとどまり、学園再占拠への展望も、職場・工場占拠闘争に向かう可能性も切り開きえなかつた。そして、全共闘派大衆の大部分はそれら党派軍団の展望なき突撃闘争に加わりきれずに「観戦」する形で疎外され、闘いは敗北を喫した。こうして六八年に登場した大衆反乱闘争と全共闘運動は、二つの敗北を受け大きく後退を余儀なくされたのである。

#### (4)七〇年Ⅱ現段階

最初にも確認したように、六九年一月闘争以降、反乱戦線Ⅰ全共闘運動は、各派の大勝利の呼号にもかかわらず、混沌と停滞を続けてきている。全共闘連合は、いつしかカンパニア動員のための党派間共闘にすりかえられ、街頭行動に動員された「反戦派労働者」も、処分弾圧攻撃の中で沈黙するか、せいぜい組合主義的闘争を行うか、おしとどめられた。

そして現時点では、その内部における党派の困い込みのための党派闘争がゆがめられた形で開始され、左翼反乱戦線の革命的再編成が迫られているのである。

### Ⅲ、労働者Ⅱ学生権力構築闘争としての全共闘運動

#### (1)革命的権力闘争の開始

六九年一月の蒲田Ⅰ羽田闘争をもつて、六七年秋の羽田闘争にはじまった七〇年安保をめぐる日本階級闘争の一歴史時代は終つた。この安保闘争の第一段階は、六七年の二つの羽田闘争や佐世保闘

争に代表されるような反乱の実力街頭行動を媒介とし、続いて日大を先頭とする大衆的学園占拠闘争、それを基礎とする新宿の大衆的地区占拠闘争として発展していったものであつた。この「占拠」闘争は、全資本主義体制の究極的基礎をなす生産過程に対する資本家支配への根底からの反乱行動である。またそれゆえ、それはブルジョア国家権力の「法と秩序」のための全組織暴力と真正面から対決せざるをえず、これとの攻防戦をおして占拠派大衆はみずから武装せざるをえない。すなわち、占拠闘争こそ、職場工場を基礎にする大衆武装と二重権力状態の形成・武装蜂起・帝国主義権力打倒・労働者階級独裁の革命的権力闘争の原点なのである。

七〇年安保階級闘争の第一段階が示した画期的意義は、日本における階級闘争が、フランス五月革命・インドシナ解放革命戦争に代表される世界階級闘争の革命的権力闘争と同じ質の闘いを、まず革命派大衆による大衆的学園占拠闘争と都市反乱によつて萌芽的に登場させた点にある。

だが先にも見てきたように安保階級闘争の第二段階は、帝国主義国家権力の総攻撃と既成の新左翼潮流にみられる反政府闘争路線の限界によつて、二つの敗北への道を歩んだのであつた。すなわち、パリケードの消極的防衛と街頭の党派軍団による突撃闘争によつて、大衆的学園占拠闘争と大衆的都市密集地区占拠闘争においてかちとられた大衆武装を解除させ、敵権力の反撃の前に屈服させられたのである。

闘争に止揚しようとする傾向と、それを阻止し、議会的組合的反政府運動の「左派」版にすぎない実力反政府闘争の水準に引きもどそうとする傾向とが、相矛盾し葛藤する歴史的過程にきたるべき革命闘争（工場占拠・二重権力・武装蜂起）への歴史的過渡期に突入したことを意味しているだろう。

そして、既成の新左翼諸派が、大衆占拠闘争を切り開く一定の歴史的役割を果たしながら、その爆発と同時に「反戦・反安保の反政府闘争」路線にしがみつき、階級闘争のより以上の前進に対する障害物に転落してしまつて示していることを示しただろう。

今や、反乱を継承し、権力闘争の萌芽を發展させる新たな指導部が要求されているのだ。

#### (2)自治会運動から全共闘運動へ

日本階級闘争が歴史的過渡期に突入する過程において、その闘争形態の發展に応じて学生戦線の闘争組織も全く新しい異質なものと發展した。

従来の学生闘争組織はいうまでもなく自治会組織であつた。これは、戦後民主主義体制の一環として形成され發展してきた。一人一票の形式的代議制を基礎とし、日常的には執行部（およびそれを支える党派組織）が活動を集約して代行するものであつた。

五〇年代後半から六〇年代中ばまでの学生運動は、そうした自治会運動を日和見主義的経済主義的に展開しようとする日共系全学連と戦闘的階級的に推進しようとする新左翼全学連運動との対抗関係として存在してきた。

そして、先にも確認したように、そうした新左翼全学連運動が果

した一定の歴史的役割と限界を明確にしたものこそ大衆的占拠・反乱闘争の昂揚であつた。そしてまた、そこから生れた大衆的乱闘組織こそ全共闘にほかならなかつた。

したがつて全共闘運動は、「占拠」というブルジョア秩序への根底からの対決行動によつて、最初から全員加盟制と一人一票の代議制をたてまえるとする自治会運動とは異つた組織原理をもつていた。すなわち、一人一票の合意によつてではなく、先進的部分の反乱行動によつて直接大衆闘争を組織する運動であり、ブルジョア秩序派としての右翼・日共民青等との内部闘争や国家権力との闘争をおして自ら武装し、決議と執行を同時に貫徹する大衆武装組織であり、それによつて学園内部の諸勢力に対し革命独裁を主張する運動であつた。

こうして全共闘運動は権力闘争を担う大衆武装組織の萌芽として登場した。

そして、自治会は、全共闘革命独裁の指導下におかれるか、または空どう化して事実上解体されていったのである。

#### (3)全共闘運動の戦略的意義

「工場占拠Ⅰ二重権力Ⅰ武装蜂起」の革命闘争が、まさしく「権力による権力の打倒」の闘いであるならば、階級闘争が世界的にそれへの歴史的過渡期に突入したということは、われわれが不断に権力と対決しつつみずからの権力を形成していく過程に突入しなればならないことを意味しているだろう。そして、全共闘が、学園占拠を基礎とする大衆武装組織であり、他の一切の秩序派大衆に革命独裁を貫徹する組織であるということは、その萌芽的形態をつくり

出したことを意味している。

だが、いうまでもなく学園の反乱は、社会的には一部の反乱であり、また反乱はそれが一部としてある限り一時的限界にとどまる。そして、資本主義社会での基本的・究極的基礎は、ブルジョア社会を社会として存続させる物質的基礎である生産過程への資本家支配にある以上、権力闘争の基礎は、近代的労働者階級の職場・工場を基礎とする「占拠・大衆武装」の闘いである。したがって、全共闘は、それ自身で自己完結的に権力たりうるわけではなく、学園占拠闘争が労働者階級本隊の工場占拠闘争の補足的一環となり、それゆえ、学園全共闘運動が工場ソヴエト運動の一翼となつたときはじめて、ブルジョア国家権力と真正面から対抗しうる反乱大衆の革命的独裁の権力として、すなわち全社会的な二重権力の一方の極として、みずから確立しうるであろう。

いいかえると、全共闘運動の戦略的意義は、それが労働者・学生権力構築のための闘いを推進していくことに存在する。

だがしかし、六九年東大・日大・パレード闘争が敗北し、学園に対する機動隊の有事出動体制が施かれはじめて以降、このような全共闘運動の階級の本質をねじまげる傾向が公然と生まれはじめた。現実の反乱行動が困難になるにしたがい、一つには、全共闘運動を理念の世界にはしらせ、自己否定論々などをはじめ「ことばの左翼性」に自己を委ねる傾向が現われた。

また一方では、全共闘運動を「ソヴエト」運動だと言いながら、ソヴエト統一戦線と規定し、そこから全共闘党派間統一戦線だと称して、現実にはソヴエト運動とは無縁の自治会型、サークル型運動のセクト間「野合共闘」に墮している傾向が著しい。学園全共

されてきた。

現時点において、さらに明確になつてきていることは、そのような闘いを現実的に推し進めることは、すなわち行動委員会総武装を進めなければならないという点である。

何故ならば、行動委員会は先進的活動家の結集体であり、不断に具体的なブルジョア学園秩序に対する行動を展開することによつて生命力をもち、また必然的に秩序派暴力（右翼・日共等）との内部階級闘争の貫徹を迫られ、それをおしてはじめて反乱戦線を拡大することが可能となるからである。

しかも、その行動委員会武装の質は、かつての部分パレードの防衛をおして全学パレードに向つた過程とは同一部分武装ではあつても異なるっており、より積極的・攻撃的な武装である。

そして、学内秩序派暴力が強固な学園ほどそうした傾向が強く、また目的意識性が要求されるであろう。それは一種の二重権力状況を作り出すことであり、それをおして学園制圧戦を貫徹することであり、かりにパレードが組まれなくてもそれは一つの新しい占拠闘争の形態であると言えるだろう。

同志諸君！革命的学友諸君！

敵階級の「安保実質化」「大学法実質化」攻撃に対し、ブルジョア学園秩序と一切の秩序派を粉砕する行動委員会を組織しよう。

そして、行動委員会総武装を大胆に推進せよ！武装行動委員会運動こそ、大衆武装の現実的担い手であり、来るべき大衆武装組織の中核体である。

(2) 学園をめぐる「人民戦争戦術」

闘は、学園内各派の野合機関であり、全国全共闘は党派間連合にすぎなくなつてきているのだ。だが、全共闘・ソヴエト運動とは革命派大衆の共闘組織であり大衆武装の組織であつて、単なる党派の「統一戦線」では決してない。

そしてまた、われわれは、いかに困難な条件があろうとも、全共闘運動の戦略的任務を空文句化させて放棄し、自治会主義路線に回帰することは断じて許されない。

そこでわれわれは、次に、全共闘運動の戦略的任務を階級闘争の現局面に即して具体化した戦術の環を明確にしていく必要に迫られているであろう。

#### 四、あらゆる学園に全共闘革命派運動を確立せよ！ 全共闘運動の当面する戦術的中心環は何か

##### (1) 行動委員会総武装と学園制圧戦

われわれは全共闘運動を総括する中から、一貫して大衆闘争組織を形成する行動的核としての行動委員会運動を追求してきた。

昨年の一二月闘争の敗北と一二月総選挙以降、帝国主義国家権力によるいわゆる「安保実質化攻撃」が、学園においても「大学法」をタテにして全面的に開始されてきた。すなわち、「学生処分」「ロックアウト」「夜間戒厳令」等々という形で具体的に加えられてきているであろう。それは、先進的労働者階級に対する「処分・弾圧」攻勢、合理化・職場支配強化の攻撃と同時併行的に開始された敵の階級的な個別撃破攻撃の一環である。

行動委員会はそうした帝国主義支配階級の攻撃に対し、みずから反乱行動をもつて反撃し、大衆的反乱を組織するものとして追求

だが、われわれのこうした学園制圧と内部階級闘争の推進に対し最近国家権力は新たな弾圧体制で臨んできている。

それは、学園周辺に配置された機動隊の有事出動体制を基本にしたがら、「暴力行為」と称して告訴を誘導し、はては授業粉砕闘争を「威力業務妨害」罪などとさげんで、逮捕状をインフレ的に乱発するなど悪らつた攻撃をかけ、それを理由に学園に出動する構造となつている。

われわれは、こうした敵権力の介入に対して、「敵の機動部隊を大衆の密集する拠点に引き寄せて叩く」という人民戦争戦術をもつて応戦しなければならないであろう。

こうした戦術は、必ずしも明確に自覚されていたわけではなかつたと言え、すでに昨年御茶の水で闘われた九・三〇日大一周年闘争に際し、駿河台・明大通り・駿河台下の地域一帯にわたつて展開された闘いにも見られたものである。

また最近、これをもつとも典型的に示したのは、アメリカ各地における学園の攻防戦であろう。アメリカ学生運動は、先のカンボジア侵略をきっかけにして明らかな転換点を迎えた。これまでのこれらの運動は、反戦カンパニアそのものであり、スケジューリング的にワシントンへの求心デモと中央大集会をくり返してきた。だが、今回の闘争はもう一方の極として学園を基礎とする反軍直接行動が形成され、州兵権力を学園とその周辺に引き寄せて対決する戦術的闘争が、ケント大学をはじめ各地に生み出されたのである。これはある意味では、アメリカ学生の一部の闘争が、闘争形態の上からは、黒人下層プロレタリアの反乱と同じ質を作り出していることを示す

ものである。そして、同時に求心デモカンパニアが「壮大な零」でしかないこともようやくつきりとされつつあるであろう。

われわれは、われわれ自身の新宿都市反乱闘争、九・三〇闘争を総括し、アメリカ階級闘争の新しい展開を教訓化して、学園をめぐる国家権力との人民戦争戦術を貫徹しようではないか。そして、そのためにはまた、学内制圧戦を徹底的に推進し、先進的大衆の密集した陣型を構築することが前提であることは言うまでもない。

### (3) 労学行動委員会を断固として組織せよ!

すでにわれわれは、全共闘運動の戦略的任務を労働者・学生権力構築闘争として設定した。だがこれは、単なるタコとびにすぎないスローガンや不確定な未来の問題として語られるものであつてはならない。われわれはその戦略的任務を具体化させ、現実実践する段階にふみこまなければならないのである。

われわれは、今年二月以来、とくに東京南部地区を突破口にして地区労学行動委員会を組織してきた。この労学行動委員会運動の具体的任務は、職場―学園の相互突入闘争を頂点にして、職制・組合官僚を実力粉砕する行動であり、日常的なビラ入れ、職場・工場入口における論争・討論の展開である。六九年後半以降、ようやく本格的に職場内部の流動化がはじまり、先進的労働者によつて部分的には職場反乱への意欲的行動が生まれつつある現在、かれら労働者階級への職場支配の維持機構となつている職制(あるいは全通のよ)に遊撃的な弾圧部隊として労務担当班をもつところもある)や社民・組合官僚の抑圧体制をゆさぶり、無力性を暴露し、プロレタリア内部の階級闘争・対社民組合官僚闘争と職場秩序の粉砕闘争を

積極的に促進させる任務を労学行動委員会が果していく必要があるのだ。

こうしたわれわれの任務に関して、イタリアの労働者・学生が非常に教訓的な事実を残している。かれらイタリアの学生は、六七年秋から六八年初夏にかけて、教育制度をめぐるいわゆる「スチューデント・パワー」運動を大規模にまきおこした。それは、中道左派連立政権を左からゆさぶりながら、労働戦線への具体的波及に向つていった。かれらは六八年の夏休みをとおして、「労働者階級と学生の社会の底辺における水平的結合」をめざして「底辺委員会」運動を開始していった。この運動は、社会党・共産党による組合の空洞化と官僚的統制に抗して推進され、ついに六九年秋の「労働協約」問題をめぐる大爆発をもたらしたのであつた。フィアット工場をはじめとして、現場での集団討議によつて戦術を決定し、その戦術も、山ネコスト、抜打ちスト、連鎖ストなどあらゆる既成の戦術をこえる闘いがイタリア全土を席卷した。

かれらの闘いは、結果として、型通りのイタリア共産党・総同盟指導部の改良的な「協約締結」と、突出部分に対する敵権力の集中弾圧、および右翼ファシストの登場という中で、今日困難な局面を迎えてはいるが、そしてまた、イタリアと日本における学生の階級的性格や位置の相違、労働運動の成熟度の異差や、労学ソヴェト運動と大衆武装組織の未形成といった疑点は存在するが、かれらの底辺委員会運動が示したプロレタリア反乱への系統的・計画的準備とその目的意識性をわれわれは十分にみずからのもとしなければならぬであろう。

そして、われわれ自身、これから夏にかけて、全面的に労学行動

委員会運動の構築に全力をあげようではないか。プロレタリア反乱への具体的な準備の課題を避けて、今日単純に学園総反乱の爆発だけを迫る愚を犯してはならないし、学園行動委員会が、具体的活動により不断に追求していかなければならない戦略的任務であろう。

### (4) 全共闘革命派運動を確立せよ!

今まで確認してきた全共闘運動の当面する戦術的中心環は次の諸点であつた。

(一) 行動委員会運動により学園のブルジョア秩序の粉砕闘争と学園内部の階級闘争を徹底的に貫徹すること、それによつて、行動委員会の総武装を獲得すること。

(二) 武装行動委員会を軸とする学園制圧戦と学園「人民戦争戦術」による対国家権力闘争を展開すること。

(三) そして、地区労学行動委員会を創出し、恒常的に労学反乱闘争を追求していくこと。

われわれは、こうした任務を表現していく全共闘革命派運動をあらゆる学園に確立しようではないか。

そして、それらの行動委員会運動相互の共闘組織として、全共闘革命派連合を形成していく必要がある。それによつて、新左翼諸派のぬぐいがたい混乱と左翼反乱戦線全体の混乱に対し、革命的再編成のイニシアチブを積極的に獲得していこうではないか。反乱の時代において、国家権力との適格な闘争や秩序派暴力との仮借なき闘争をあいまいにする一切の部分と断固たる反乱戦線内部の闘争を貫徹することは、全共闘革命派・行動委員会自身の歴史的任務にほかならないからである。

### (5) 青年共産同盟の任務

われわれは青年共産同盟を、行動委員会運動の共産主義的中核体として位置づけて闘いを進めてきた。

現在、大衆行動委員会自身の武装が進行し、武装行動委員会化がめざされているという事は、その中核体である青年共産同盟もまた当然武装していなければならないことを意味しているであろう。すなわち、青年共産同盟はたしかに政治組織ではあるが、単なる政治組織ではなく、みずから武装した政治組織であるということである。

しかも、その武装の質は、行動委員会一般のそれではなく、共産主義的武装である。

行動委員会運動は、それを徹底的に推進していく過程で、対権力対右翼等との闘争を貫徹するためには、一つには、バルチザンの組織が、もう一つには、各戦線の行動委員会の地区・全都・全国的結合が要求されるであろう。だが、この任務のイニシアチブをとるには、行動委員会一般よりもさらに高度な目的意識性もまた要求される。バルチザンの組織の行動は数名以下の班が基礎単位であり、もつとも自立した戦闘を全体との有機的連関の中で求められる。また戦線別行動委員会を地区・全都・全国的に結合すること、しかもそれをすぐれて実践的に、闘争の拠点への集中や共同運動を機動的に領導するためには、やはり日常的な階級闘争全体に関する政治討論と検討が前提とされる。

われわれ青年共産同盟は、より目的意識的に政治的・実践的訓練を身につけた共産主義的武装政治組織として、こうした行動委員会運動を前進させていくであろう。

## 工場・職場に

## 労働者行動委運動を建設せよ！

## 序 今日の労働戦線の一般的特質

(1) フランス五月革命・イタリアの労学反乱・インドシナ半島の革命戦争の発展等、労働者階級と人類の解放、資本主義・帝国主義を打倒し、プロレタリア権力を樹立する闘いは、国際的に高揚し、激化している。

(2) 日本では、二年間の安保階級闘争の敗北以降、階級情勢はブルジョア官僚執行権力独裁の強化、帝国主義社民の活動、「新左翼」反乱戦線の登場と混乱という総反乱への過渡期に入った。この新しい段階の、だがもう一つの特徴は、個別分散的ではあるが労働者反乱の頻発化である。

(3) 今日の労働戦線の全体的特徴の第一は、同盟・総評を問わず組合官僚の反動的右傾化である。かれらは資本・国家権力の攻撃に自己の取引き闘争を麻ひさせられたばかりか、二年間の反乱闘争によって左からも麻ひさせられ、ついに帝国主義社民として自己を保身する道を選択するにいたつた。

(4) この結果、公労協・民間を問わず、組合が、事実上、自己の機能を喪失する事態を示しており、労働者大衆は習慣として組合員となつてはいるが、これに何らの期待もいなくことはできないという気分が急速に高まつている。

(5) さらに最近、資本・経営による組合の事実上の否定（団交制限・平和協定要求）、賃金と合理化の取引きもしない、労務政策の強化による一切の職場闘争の否定等の攻撃によつて露骨な攻撃をかけられ、「反乱」を強いられる組合が増している。こうした場合は、最も目的意識的闘いが組織されないとすれば、労働者階級はいたずらに敗北を強いられ、革命闘争への展望を失つてしまふであろう。

(6) 未組織労働者の「組合結成」も、今日ほぼ右と同じ運命にあり、もし強力な指導部に導びかれるならば、かれらの巨大なエネルギーを爆発させることが可能であろう。

(7) として今日、学生全共闘運動の労学共闘への動きは、労働者権力のための闘争にとつて決定的意義をもつにいたつた。かれらの闘いと結合は、フランス、イタリアの教訓にみられるように、日本

革命をきりひらくための不可欠の条件となつた。

(8) 右のような事情に対して、労働者・ソヴェト運動・行動委員会運動を構築するため、われわれはみずからの貴重な教訓をふまえて、今日の任務方針を再度原則的に明確にさせねばならぬときである。

## 一、労働組合とは何か、労働組合運動とは何か

プロレタリア解放の闘いの中で、労働組合と労働組合運動

とは何か、という課題は、先進資本主義国では古くて新しい根本問題の一つである。われわれの日々の闘いの中で絶えず問われているこの問題を、われわれはまず原則的に確認しておかなければならない。

## (1) 労働組合の歴史

労働組合は、資本主義の発生と同時に生まれた。資本主義が世界史上はじめて確立されたイギリスで、労働者階級の奴隷的状态を開しようとした闘いの一つとして、労働組合が試みられた。だが産業革命から、イギリスの綿工業が確立された一九世紀前半の時期の労働組合は、闘争のためのストライキ委員会や、一方、友愛会相互援助会等の組織と組み合わせられた一組織にすぎず、今日のような普遍的性格をもつていたわけではない。炭坑や鉱山の暴動・ラッダイト運動（機械打ちこわし）以外に闘うすべもなかつた時代には、労働組合は資本家にとつても労働者にとつても社会的意味をもつことはできなかった。

今日みられるような労働組合がようやく生まれたのは、一八五〇

年代のイギリスの鉄工業を中心とする熟練工・一部特技的労働者の「合同労働組合」を起源としている。この組合は、「高額の組合費」を保障して、ストライキ資金とし、相互援助的役割を果たした。だから、イギリスの上層労働者の地位を守るといふのが、この組合の目的と任務であつた。その後、このような役割を担う組合が次第に成長し、「普通選挙制」のための「自由党」と結んだ労働組合幹部の活動と一体となつて、第一次大戦前後によりやく労働組合はある程度の勢力となることのできた。

ドイツの労働組合やドイツ社会民主党の台頭も同じであつて、第二インターナショナルがその指導的任務を果たした。ヨーロッパでは一九世紀の末から二〇世紀初頭に、ほぼ、労働組合法、工場法が「刑罰的悪」や「社会主義取締法」と同時に制定され、「資本主義の打倒」を任務とし「地位改善」を目的とする労働者組織が、資本家階級によつて認められたのである。

このような労働組合や第二インターナショナルは、第一次大戦の危機の中で大崩壊した。そして大戦直後のドイツ革命がついに敗北したのち、今度は資本主義の安定を保障する一つの体制機構として大規模に確立された。ヨーロッパ各国では、この時より労働者階級の殆どに近い労働者が、労働組合に組織されるほど巨大な組織となつたが、それは革命の敗北を代償として、資本家階級との話し合いと取引きの機関となり、資本家階級の側からすれば、労働者階級の中のこの一定の部分労働組合との取引き関係を操作すれば、階級支配を保障しようという機構として意味をもつたのである。社会民主党はその議会代表部であつた。

だから資本家階級の側から言えば、この労働組合との関係は、一

定の譲歩、「社会福祉」的性格をもつていた。そして、  
制Ⅱ階級の妥協体制は、三〇年代初期の大破局の中で再び崩壊し、  
第二次大戦後のブルジョアの戦後処理が成功して後、再び今日のよ  
うな大規模な労働組合の復活を生み出したわけである。

日本では、誰もが知つてるように、労働組合が右のような意味  
で確立されたのは、第二次大戦後、戦後革命期の激動がレッドパー  
ジと百万人の大量処分の攻撃に敗れた後、総評がGHQによつて生  
み出された時である。また右のような労働組合の性格（労働者階級  
の中の一部の利益を代表し、資本主義の安定の機構として機能する）  
は、第三ロープの職能的組合と日本の企業別組合というような形態  
の相違の如何を問わず、本質的に同じことなのである。

### (2) 労働組合の現実、その二面性

労働組合とは何か。それは通常「弾圧のあらしの中で勝ちとられ  
た団結権」であるというように説明される。これは労働組合の「保  
守性」とかくされた革命性」の二面的性格を内包した表現である。

日本では、労働組合法で、労働組合の目的は労働者の地位向上・  
生活の維持改善に限定され、「正当な」争議行為のみが認められて  
おり、この限界は、全ての労働組合を律している。ここに労働組合  
の保守性の理論的ヘドメⅡ国家権力によるヘドメがある。

しかも労働組合は、労働者自身の保守性によつて、現実的に体制  
内組織としての役割を果たし、保守的組合官僚と官僚制的体質を維  
持している。この労働者の保守性とは、労働者が労働力商品の販売  
者として、資本家と同じような商品売買者として運命づけられてい  
る日常生活に基礎をおいた「自分だけは良くなりたいたい」とか「自分

だけは安全でありたい」というブルジョア意識である。

ところが労働者は、実際には生産の担い手Ⅱ生産の主体者であつ  
て、工場に密集して生産するという人類史上初めて生まれた最も人  
間的な行為Ⅱ自然を変革する行為の主人公である。この労働者が、  
資本に支配されているということに反逆するということは、即ち勞  
働者が生産過程で反逆する場合は、本質的に革命的行為となる。生  
産過程に組織されている労働組合の「かくされた革命性」はここに  
基礎がある。マルクス、エンゲルスが「労働組合は革命の学校」と  
いい、レーニンが「すべてのストライキには革命のヒドラがかくさ  
れている」といつた所以である。

だが、われわれはこの場合、この革命性とは「かくされた革命性  
」にほかならないこと、この「かくされた革命性」が「公然たる革  
命性」Ⅱ公然たる反逆行動となる時は、労働組合の右にみえてきたよ  
うな資本の支配の機構としての役割や保守性と真向うから非和解的  
対立と葛藤をさせて通ることはできず、この目的意識的闘いの中に  
こそ、労働者階級解放の可能性があることを知らなければならぬ。

### (3) 労働組合運動と革命運動

だから労働組合運動は、その内部に労働者階級の「かくされた革  
命性」を秘めつつも、そしてまた、絶えずこの革命性が表面化され  
はするが、現実には、資本主義を労働者階級の内部からささえると  
いう役割を負わされていることをも知らねばならない。

だが、労働者階級の組織は、はじめにみたように、決して労働組  
合だけが全てではない。

危機の時代、革命的激動の時代には、労働者階級はコミューンや

ソビエト・レーテに結集し、武器をとつて革命闘争を闘つた。コミ  
ューンは、フランス大革命のバリ下層人民大衆（サンキユロット）  
Ⅱ職人労働者の地域的に結集された闘争機関であつた。一八七一年  
のバリ・コミューンも同様である。

これに対して一九〇五年と一七年のロシアのソビエト評議会やド  
イツのレーテは、世界史上はじめて生み出された工場労働者の大衆  
闘争組織Ⅱゼネストの機関であり、生産過程で大衆的に武装された  
労働者階級の権力機関であつた。そして、このソビエトやレーテの  
中核的担い手が行動委員会であつて、フランスの「五月革命」やイ  
タリアの労働者反乱を担つた組織なのである。

危機の時代に労働組合がマヒし、労働者階級の現状打開の反逆が  
問われる場合、われわれが何をめざすべきか。労働組合とソビエト  
の革命的選択が今日問われているのである。

### 二、行動委員会運動とは何か

「組合運動とは何か」を明らかにしたわれわれは、次に六八年！  
七〇年にかけてヨーロッパ労働運動と日本学生運動に爆発的に登場  
した「工場占拠」「学園占拠」闘争の意味とそれを担つた組合とは  
異なる運動について知らねばならない。結論的に言えば、それらは「  
労働者権力樹立」を日程にのせた闘いが、今や先進国労働者・学生  
の手で開始されたことを告げたものであり、これを前進させようと  
するわれわれにとつて、かかる運動のもつ任務を明確にさせ得なけ  
れば、一歩も闘いを進めることはできないのが今日の階級闘争の現  
状であるからだ。

(一) 六八年五月、フランス一千万プロレタリアートは「工場占拠  
ゼネスト」に立ち上つた。ド・ゴールとフランス共産党をはじめと  
した既成指導部は、わずかな労働条件の改善を行なう一方、軍隊の  
動員まで行なつてこれを終らせるのに必死となつた。では「工場占  
拠闘争」とは何であり、フランスのこの事態は何を意味したのだら  
うか。

(1) 「工場占拠闘争」とは、資本主義的生産の基礎Ⅱ工場で働く勞  
働者階級が、資本との闘いにおいて、ある段階にくるとらざるを  
得ない闘争形態であるが、それはどのような小さなスローガンをも  
つて闘われようと、資本主義国家の「法と秩序」への真正面からの  
挑戦となる闘いである。資本主義社会の「法と秩序」の根本は資本  
家私有財産と資本家的生産の維持防衛にあるが、「工場占拠」闘争  
は、かかる資本家財産の重大部分Ⅱ工場を労働者が奪い、その秩序  
をマヒさせてしまうからである。

(2) フランス「五月ゼネスト」はそうした内実をもつ闘いが、全フ  
ランス的規模で闘われたことを物語つており、ブルジョア権力に対  
する労働者の「二重権力」を対置した事態を作りだしたといつて言  
いすぎではない。資本主義社会の中央集権化された官僚執行権力（  
官僚・軍隊）と共に資本家支配をささえる生産秩序・工場支配を勞  
働者がマヒさせ、なかばそこを握りしめたことをそれは意味したか  
らである。

□ かかる「工場占拠」闘争の火つけ役となり、終始運動を支え



たものこそ、フランス各地区・各工場で生まれ闘争の中で数を増した「闘争委員会」「行動委員会」またそれを相互に結びつけた「調整委員会」であった。

これらの組織は、形成過程によつてそれぞれに名称は異なるが、「占拠闘争」を闘う部分によつて自発的に組織されたという点で一致している。それは少数で出発する場合が多いが、闘いの中で大衆を結合するところの運動なのである。組合執行部の統制化、多数を前提としてしか出発し得ない「組合運動」とは何と違うことであらう。

こゝに示した運動は、イタリアにおいては「労学底辺委員会」としてあり、「熱い秋」にいたる連続的ゼネストをかつてないまでに高揚させた主動力となつた。日本における「学園占拠」闘争の全国的爆発が、一人一票の「自治会運動」ではなく、「全共闘」によつて担われたことはよく知られてい

③では、何故「やるやつがやる」とも言うべきかかる闘いが、広範に大衆的結集をなしとげ「工場占拠」「学園占拠」闘争を通し、「二重権力」「労働者権力」を準備しうるか。

(1)その現在の背景に、民主的・組合的要求をたな上げした政府資本の攻撃が六五年を境にして表面化したからである。フランスではド・ゴール執行権力独裁の下、「金凍結」「失業問題」が頭をもたげ、イタリアにおいても同じ事情が労働者を不安におとしめていた。やるやつが行動を開始するや、大衆的不満は爆発するのが当然である。

(2)資本主義社会での資本家と労働者の支配・服従関係は労働力の

い。すなわちそれは、「二重権力」から「資本家権力打倒」「労働者権力樹立」へと向かう「ソビエト運動」にはかならない。

九一七年、ロシアのソビエト運動も、労働者階級の工場を基礎にした「占拠闘争」を中軸に労働者が武装し、権力奪取をかちとつていつたのである。

### 三、われわれの行動委員会運動の教訓

われわれはこの間、「組合運動」から「行動委運動」への転換を全力で追求してきたが、そこでの教訓は何であつたか。

(一) 社共・民同既成指導部を粉碎して行く闘いが闘争を左右する。  
S 労組(合化労連・四〇〇名)は、行動委メンバー(公然化してない)の解雇攻撃に対し、七二パーセントで「スト権」を確立して「全面二四時間スト」にまで発展していったが、組合幹部(共・民同)は「就労闘争」を回避し、行動委メンバーの独自活動を一切禁じ、「なまじのストでは解雇撤回はむづかしい」とどう喝を加えつつ、「二四時間ストを時限スト」に切りかえることによつて闘争を解体させてしまった。

これは何も例外ではなく、合理化・処分粉碎等の非妥協的闘いを前にした既成指導部の常なる対応である。が、こうした非妥協的攻撃が日常化し、特に闘う部分への弾圧攻撃を通じた資本への屈服を労働者に強制する現在の資本のやり方に対し、われわれがそれへの敗北を望まぬなら、闘争経過から明確である闘争の妨害物と化した既成指導部を粉碎することが是非とも必要となる。

売買を通して行なわれているため、その売買関係が安定的に継続しうるときは、労働力商品の所有者である労働者もそれを高く売るかどうかということを中心とした組合的運動に頭を突っこんでしまうが、現在のように資本主義世界体制が動揺し、労資関係が不安定になるや、ただでさえ一方的職制支配の中にあり、資本への重圧を日常的にわがものにしていく工場での労働者は、そこを足場に闘いをやらざるを得ない。そして、かかる闘いは「工場占拠」へと向かうや、政府・資本の非妥協的対応の前に、「生産管理闘争」への不可避的進行を秘めている。それは「工場」での主人公が自らであることを労働者に自覚させるのみか、資本家的職制支配の下での労働よりも一〇〇倍も生き生きしたものであることを知らしめる闘いとなる。

「工場占拠」闘争の「ゼネスト」への発展、それを通じた「生産管理闘争」こそ、労働者の闘いを自己を権力に向けて形成するところの實質を与える闘いなのである。

四 しかし、「工場占拠」闘争、それを支える運動(われわれはこれを「行動委員会運動」と名づける)は容易に進まない。先のことから、その闘いは権力・資本のみか、資本への屈服によつて自己保存をはかろうとする既成指導部をも敵にまわすからである。とすれば、行動委員会運動とは「占拠闘争」のゼネストの実現をめざし、これに敵対する権力・既成指導部との闘いをくりかえしながら発展するところの運動であり、かかる闘いを通して権力・資本との武装的対決にまで発展する闘いであるといわねばならない。そして「占拠闘争」は権力の介入の前に「武装占拠」闘争へ発展せざるを得な

ところが「組合内反対派」から「行動委」をめざしはじめたばかりのわれわれは、「スト権」提案を行ない、「就労闘争」を約束する組合幹部との対決を遅らしてしまい、「妥結提案」大会に臨んでも、ここにおいて執行部に圧力をかけたにとどまり、一票投票に結局一切をまかせてしまった。

われわれに問われていたのは、「就労闘争」実現をめざした独自活動を「組合統制」をおかしてまでやることであつた。その闘いは、当然組合の「二重処分」をまねくが、闘争経過はそれを通してしか、闘いが進まぬことを示している。組合幹部と行動委との闘いこそ、その後の闘争の一切がかかっていたのである。

### □ 職場反乱・工場突入闘争

S 労組の闘いに対し、公労協O支部での行動委の闘いは、一〇、一一月安保闘争を背景に、はじめから「組合」とは無関係に闘いが組織された。昼休みデモから時間外集会の時間内へのなだれ込みの追求、そして予想される「処分」攻撃に対するステツカーはり、これを妨げる職制との攻防。かかる闘いは、組合執行部を組合室におき去り、大衆のこれへの注目、結集を実現させた。

そしてついに、かかる闘いに恐怖した局側は、行動委の中心メンバーへの「解雇」「停職」攻撃を発表したが、闘いはさらに地区労学共闘による「就労闘争」に発展し、これを阻止する職制を暴力粉碎するその闘いは、数名の逮捕者を出しながらも、組合幹部の無力、職制の無力を組合員全大衆の前にさらけ出し、内部における行動委の闘いの持続・拡大を促した。

この闘争の教えるものは、行動委の断固たる独自行動が大衆

を結集し得ること、闘いを発展させるためには「労学共闘」が不可欠なことである。こうした闘いを労学を問わないで実行することこそ、企業の枠にとられない労学の行動委を地区に工場に形成せしめ、闘いの展望を切り開く可能性を与えるのである。先のS工場闘いは、その後、労学行動委の工場突入闘争を媒介に地区社共既成指導部に対する闘いとなり、区労連労働者の流動を促している。

〔B〕権力の介入は不可避であり、それと如何に対決するかがその後の闘いのカギとなる。

「学園占拠」闘争もそうであるが、労働者の「占拠闘争」「労学行動委による「実力就労」「工場突入」闘争も必ず警察機動隊の弾圧をまねく。

Sの「工場突入」、Oの「就労闘争」における職制粉砕闘争は、S工場、O局の労働者の労学行動委運動への期待・結集を促したが、権力との対決において、われわれは権力をマヒ・後退させる闘いへと向い得なかつたが故に、内部の闘いを連続化し、これを契機とした地区・他工場への闘争の波及、既成指導部粉砕闘争へと大胆な行動委運動の道を歩むことができなかった。

またRの闘いは、組合執行部に位置する戦闘的左翼の解雇。一〇・十一月闘争参加者への処分を通して全面化した資本攻撃に対して機能マヒした組合にかわる行動委運動を「就労」「職制追放」の闘いとして展開し、それをなせば実現したが、行動委中心メンバー数名が、就労闘争のスキをねらわれ権力の手にかかったことによつて、行動委は大きく展望を失なつていった。

権力との闘争、それは都市反乱と遊撃戦である。七〇年安保階級

闘争が敗北した今日、個々の職場反乱闘争は、容易に総反乱に発展するとはいえないが、その任務は、個別反乱の波及を最大の拡大目標とし、その力によつて権力と闘い抜かねばならない。

そして、個別反乱に対する権力の弾圧に対しては、職場と職場周辺地区の大衆的群衆戦。人民戦争戦術、即ち敵を味方の内部にひき入れてたたくという人民戦争戦術によつて闘い抜き、前進しなければならぬ。

#### 四、行動委員会の任務

フランス一千万プロレタリアートの「工場占拠ゼネスト」は支配の譲歩と弾圧、フランス共産党のそれとの「取りひき」の下に断体した。行動委員会運動は大きく後退していった。日本における全共闘「学園占拠闘争」も権力の全面的介入と日共を先頭にした秩序派の反革命的台頭の前に屈服した。

何故か？

たしかに一つには情勢のつまりが左右しているであろう。フランスでも、イタリヤでも「工場占拠闘争」「連続ゼネスト」を眼前にした支配階級の「賃上げ」など労働条件の改善を約束譲歩があつた。日本においては、「学園占拠」が「工場占拠」へとフランス規模でただちに波及する可能性をもつていたとは言えない。しかし、それが一部「学生反乱」を突破口に一千万労働者が「工場占拠ゼネスト」に決起することを予想し得たであろうか。日大をはじめとした「学園占拠」闘争の全国的爆発をだれが十分に指導しえたであろうか。

「工場占拠ゼネスト」が実現したということは、すでにわれわれが明らかにしたように、「二重権力」「ブルジョア権力打倒」の一步手前まで闘いが近づいたことを意味している。「学園占拠闘争」とそれを背景にした中小企業の革命的労働者の「職場占拠」闘争は、それが「法と秩序」に正面から敵対する闘いであり、権力の攻撃の前に孤立を望まぬならば、その闘いを軸に他工場・周辺地区への闘いの拡大が死活問題になる。フランスにおいて、日本において、こうした課題を問われた行動委運動が、どれだけその任務を担いできたであろうか。行動委の主体的問題が、何よりも闘争進退の最大問題として明らかにされねばならないのだ。

イタリヤでは「学園反乱」に決起した学生は、フランスの行動委運動の教訓をうけ、ただちに「地区」へ「工場」へと向つた。工場へのビラ入れ、門前集会、争議工場への「突入」、その他様々な機会を通しての労働者との交流。すむわち「労学底辺委員会運動」である。そして、こうした一〇二年間にわたる「底辺委員会運動」が「ゼネスト」のヘゲモニーを下部労働者に移し、闘争を長期・深刻たらしめたのである。

とじたら、われわれは「行動委運動」をその萌芽の中におさえこんでしまおうとする支配者階級の攻撃の前に、目的意識的な行動委運動の開始を今こそ全力で準備せねばならない。

①まずわれわれは、「組合左翼反対派」から、それが合法であるか非合法であるかを問わず「行動委員会運動」への転換を自らに決意し、組合内外の闘いへと向かおう。その闘いの一步一步が「労働者権力樹立」「人類解放」の内容をもつ闘いであることを確認しよう。

闘争が敗北した今日、個々の職場反乱闘争は、容易に総反乱に発展するとはいえないが、その任務は、個別反乱の波及を最大の拡大目標とし、その力によつて権力と闘い抜かねばならない。

そして、個別反乱に対する権力の弾圧に対しては、職場と職場周辺地区の大衆的群衆戦。人民戦争戦術、即ち敵を味方の内部にひき入れてたたくという人民戦争戦術によつて闘い抜き、前進しなければならぬ。

#### 四、行動委員会の任務

フランス一千万プロレタリアートの「工場占拠ゼネスト」は支配の譲歩と弾圧、フランス共産党のそれとの「取りひき」の下に断体した。行動委員会運動は大きく後退していった。日本における全共闘「学園占拠闘争」も権力の全面的介入と日共を先頭にした秩序派の反革命的台頭の前に屈服した。

何故か？

たしかに一つには情勢のつまりが左右しているであろう。フランスでも、イタリヤでも「工場占拠闘争」「連続ゼネスト」を眼前にした支配階級の「賃上げ」など労働条件の改善を約束譲歩があつた。日本においては、「学園占拠」が「工場占拠」へとフランス規模でただちに波及する可能性をもつていたとは言えない。しかし、それが一部「学生反乱」を突破口に一千万労働者が「工場占拠ゼネスト」に決起することを予想し得たであろうか。日大をはじめとした「学園占拠」闘争の全国的爆発をだれが十分に指導しえたであろうか。

②そして自らの周辺で行動委を組織しつつ、労働者・学生の行動委共闘を地区で結ぼう。学生は工場地区へ、労働者は学園へ。そして、学園・工場の現状と闘いの現実を相互に報告しあい、共闘関係の実践化を具体化しよう。

③闘争を軸に「学園」工場相互突入」「工場相互突入」闘争へ。その闘いの基本は右の戦術である。行動委運動は他への波及によつてのみ、資本と権力の介入を積極的に反撃しうる。闘いの段階をふまえ、「職制秩序」「組合秩序」を切り崩す「突入」闘争が、組合内外の闘いを前進させることは、われわれが教訓でみてきたことである。

④労学行動委共闘による社共・組合ダラ粉砕闘争を。

工場の内外で労働者は社共既成指導部にかわる公然たる闘う部隊の登場を待っている。社共既成指導部の反革命性を大衆の眼前で暴露し、粉砕する闘いが重大だ。

北部地区における、社共学習会、区労連集会への行動委のかかる闘いは、地区でのかげらのヘゲモニーをマヒさせ、多大の支持者を行動委運動へと向わせている。

⑤人民の眼前で権力と闘う準備を。

われわれの闘いに対する権力の介入は避けられない。われわれは行動委共闘の力で、闘争への権力の介入をマヒ・無力たらしめる戦術Ⅱ権力を人民の中へひき込み叩く人民戦争型Ⅱの追求を試み、実現しよう。

反戦派労働者への資本と既成指導部の集中的攻撃がいたるところで行われている。反弾圧闘争を中心にしながら右の闘いを実践する



印刷不鮮明部分の校正

32	30	29		28	10	9	6	頁
下	上	上	下	下	上	下	上	下
12	21	14	9	23	2	1	7	12
								14
								14

校正部分

陥るのである。

緊急出動体制

学園支配攻撃の手段と……

訣別しなければ

そしてこのような体

ところが労働者は

だが、労働者階級の

得ない闘争形態

よく知られている。

「賃金凍結」

階級の譲歩と

